



今月の主な目次

○米国北西部州における牧草採種並びに乾草生産概況 ○営業所だより シリーズ⑩

○牛サイドから見た、土壤、
草地管理の問題点について

○苦小牧工場の紹介と製品のPR

○雪印種苗育成“牧草新品種”の紹介

時の話題

粗飼料完全自給？

平成27(2015)年度までに自給飼料基盤に立脚した畜産経営を育成したい、というのが本年3月、農水省から出された方針です¹。口蹄疫、BSEなどの問題が輸入飼料とかかわっていることから安全な国産飼料を増産したいという方針には無論賛成ですが、経済的に可能か否かについては考慮の余地がありそうです。

どのような条件の地域にいかなる農業経営が立地するかの研究は、古くはチューネンの「孤立国」²にさかのぼります。消費地である孤立国の中心に位置する都市に対して生産物の輸送条件その他の要因によって最大の地代をあげうる自由式農業が都市に隣接して立地し、畜産は都市からもっとも離れたところに立地する、という立論です。宇宙船地球号全体を孤立国とみなせば、彼の立論はいまも通用します。

農水省では10年後に粗飼料完全自給を目標に掲げています³。そのためのメニューの最初に挙げているのが「国産稲わら飼料利用の拡大」です。米生産調整が長年にわたり、一人当たり米消費量がピーク時の半分に減ると、わが国の名目上の水田面積は単収増も手伝って半分以下で足りることになります。残りの水田を他の目的に有効に利用していないとの反省や、耕作放棄地の増加を看過できないとの危機感があるようです。これを効率的に利用するべく政策誘導したいのだと「基本方針」から読み取れます。メニューの第二がそれです。水田の利用効率を高める政策は重要です。水田で飼料用稲を生産してホールクロップ・サイレージとして利用しようという方針もそのひとつです。

しかし、乳牛・肉牛飼育頭数の55%は北海道・九州で飼育しています。水田面積の84%は北海道、九州以

外の地域に分布しており、水田転作面積のうち北海道、九州で全国の27%を占めるにすぎません⁴。牛を飼っているところには水田が少なく、水田地帯には牛が少ないのです。粗飼料は運搬費用が高みます。北海道からヒョイト手をのばして都府県からロハでもってくるわけには行きません。私なりに調べてみると、本州から道東へ運ぶコストはフェリーと陸送の組み合わせでトン当たりざっと1万円にはなります。イネ・ホールクロップ・サイレージのコストがトン2.6万円。それに輸送コストを加えて畜産農家の価格は3.6万円で輸入へイキューブの戸前渡し価格3.4万円を上回ります。

稲作農家は転作奨励金を当てこんで米以外の作物を選びます。経済的なインセンティブ(誘引)がなければ水田でホールクロップ・サイレージをつくる可能性は低いのです。ではまったく可能性がないのでしょうか？ 蔦谷氏の計算では、飼料イネを転作田に栽培した場合、移植栽培では単収で7万4千円の赤字で、奨励金6万1千円見込んでもなお収支償いません。直播でも同様ですが、ホールクロップ・サイレージであれば9千円の赤字を奨励金6万3千円でカバーして黒字となります⁵。

10年後には粗飼料自給率を100%にしたい、というのが農水省の方針ですが、努力目標を掲げたのだ、と受け止めたいものです。チューネン先生に言わせれば、「うーん、日本はこれだけ工業に力をいれてなお畜産でもがんばるねえ。私の理論では例外的かな？」となりそうです。リカードの説く比較生産費説⁶によって、世界各国が自国にとって相対的に有利な産業に完全特化することはありえません。不利であっても日本の農業を守る必要があります。WTO交渉でも日本の立場を主張して安易に関税引き下げに応ずるべきではありません。(酪農総合研究所 所長 土井 時久)

1 農水省(2005)酪農及び肉牛生産の近代化を図るための基本方針、pp.12~14。
2 近藤康男(1989)チューネン孤立国、近代経済学古典選集-1、日本経済評論社。古典の代表格です。研究者以外はほとんど読まないでしょうが、立論の緻密さは大いに魅力的です。秋の夜長の読書にうってつけです。農産物を都市へ運ぶ際の馬のエサを運ぶ費用も忘れられない周到な議論です。昔の北海道畑作では農耕場のエサのためにかなりの畑地を要したのに似ています。

3 国産粗飼料が輸入粗飼料にまさる点については、三浦梧楼(1988)飼料作物の70課題、酪農総合研究所、で詳細に論じている。
4 これらの数値は、農水省(2005)ポケット農林水産統計による。
5 青木寿美男(2001)経営評価、飼料イネ、畜産草地研究所、pp.54-58、所収。
6 これも古典です。デヴィッド・リカード「経済学及び課税の原理」、岩波文庫に納められています。